

寄稿

知的障がい者に芝居ができるか！

俳優・演出家 金田一仁志

東京では18年演劇教育を担当していたし、こっちでも児童劇団や市民ミュージカルを立ち上げたりで、つまりそれなりに自信はあった。しかし知的障がい者だけの演劇製作は初めてだったのだ。

10年程前の話。出来たばかりの学校「チャレンジキャンパスさっぽろ」(高等支援学校を卒業した知的障がいのある若者たちが「自立」することを目指す学びの作業所)に呼ばれた。

舞台では大きな声で、的確に台詞を伝えなければならない。だから僕は初日、20人の生徒の前で「アメンボあかいなアイウエオ！」とやったのだ。とたんに一人の女の子が教室を飛び出して行く！大きな声(を出す人)が怖いのだという。…どうしろというのだ？ よし、インプロを試してみよう…ダメだルールを理解できない！こんな時は小学校高学年に大ウケの群読「おまつり」だ。あれなら笑顔で、自然に声が出るだろう。やってる(ノってる)時はいいのだが板書(説明)になるととたんにトーンダウン(おい！知らないことに興味を持つのが演劇の始まりだろ！)。それなら、と身体に関わる詩(下ネタ)を集め、朗読をやることに。選んだのはまどみちおの「おならはえらい」と谷川俊太郎の「おならうた」。これはウケたが、下ネタばかりやっても稽古には結びつかない。屁の推進力は弱いのだ。週一回の稽古日が、すこし苦痛になってきた…。

そんなとき思い出したのが高校時代に見たテレビ番組「サンデー九」だった。歌手の坂本九さんが道内各地の障がい者を訪ね、笑顔をふりまいていく。九さんは言った。「どうして障がい者を地方に追いやるのだろう。人は皆、齢をとれば障がいを持つのに」。

その言葉は高校生の僕の胸に深く突きささった。「九さんみたいになりたい！行く先々で笑顔の花を咲かせる人に！」。だから僕は就職先に地方巡演劇団を選んだのだ。

九さんはいつもやさしい笑顔だった。そうだ、僕も暗い顔なんかしてられない！紆余曲折を経て、拙作のミュージカル「おおいともだち！」にたどりつくのに三年を要した。

音楽専門学校の校長をやっていた頃に児童向けに書いた作品で、当時の学生に作曲をお願いした。「先生、声に出して読んで！」というので、学校のロビーで読み上げた。涙目で聞いていた彼女は二日後、一枚のCDを手に見われた。作中の全曲(テーマからBGMまで)が収められている！(東日本大震災のあと、多くの企業がCMを自粛したので、テレビから流れてくるのは「アンパンマンマーチ」と♪こんにちは～ありがとうさぎ～ポポポーン！の二曲だけだった。

あの「ポポポーン！」の作曲者こそ「おおいともだち！」全曲を徹夜で書き上げた若き日の嶋倉紗希である。その時の音源を、今も使わせていただいている。感謝。)

さて、この文章のタイトル「知的障がい者に芝居ができるか！」は、先々で何度も言われた言葉だ。たしかに台詞の覚えは悪い(遅い!)、明確ではない(口を開ける!)リアクションが下手(相手の思いをキャッチしろ!)。…しかたがない、そういう障がいなのだ。だが一度、彼らの舞台を観てやってほしい(最初は同情でもかまわない)。「知的障がい者に芝居が…」の思いはきっと変わる！と僕は信じている。

今年もやまびこ座の皆さんのご協力で、11月15日(土)・16日(日)の二日間、「おおいともだち！」を上演させていただく。

上演団体は「劇団ハスカップ」。Handicap(ハンディキャップを持つ)Artists(アーティストたちが)Sapporo(札幌で)Challenge(チャレンジする=学校名でもある)Art(芸術)Project(大規模事業計画)の頭文字。

きびしい北海道の大自然の中でたくましく自生するハスカップに、障がいをかかえながらも現実社会で生きていかなければならぬ彼、彼女らの姿を重ねて命名した。ぜひ一度、ご覧あれ！



金田一 仁志(きんだいち ひとし)

専門劇団より独立。21年に渡り三越テレビショッピングキャスター。その間、さっぽろ市民ミュージカル創設、北海道新聞コラム執筆(6年)、三度の海外公演。

2019年北海道のうたごえ70周年(キタラ大ホール)脚本演出、21年教文オペラ「ノノ」(札幌市教育文化会館大ホール)演出、22年腹話術日本一決定戦(神戸)でテレビ「ナニコレ珍百景」に選出。24年には市立定山溪学園校歌を作詞(くわしくはウィキペディアで)。

日本俳優連合所属。北翔大学外部研究員。STVテレビ「どさんこ市場」キャスター。



みんなで楽しめる場ってどんな場所？

【第3回】——いろいろな視点から考えてみよう！

第三回目は、横浜市緑区にあるNPO法人「ぶかぶか」の高崎明さんをご紹介します。

高崎さんは元養護学校の先生で、障がいのある人たちに惚れ込み、退職金をつぎ込んで「ぶかぶか」を立ち上げました。現在、ぶかぶかではパン屋・カフェ・お惣菜屋・アートショップを運営し、昨年までの9年間はメンバーと地域の人と一緒に演劇をつくるワークショップも行ってきました。養護学校時代から「演劇の可能性」を信じ、実践を続けてきた高崎さんにお話を伺いました。

正木：ぶかぶかで演劇ワークショップを始めたきっかけは何だったのでしょうか。

高崎：養護学校で教師をして3年ほど経った頃、学校という場ではどうしても支援や指導に力が入り、子どもたちを型にはめ込んでしまうと感じていました。彼らのありのままの姿を引き出すにはどうしたらよいか悩んでいたとき、世田谷で開催された「市民の市場」でフィリピンの方々による演劇ワークショップに参加しました。その楽しさに感激し、学校のプレイルームで子どもや保護者が一緒になって芝居をつくる「芝居小屋」を始めました。子どもも保護者もめいっぱい楽しみ、芝居を通して自由になれる体験ができたのです。その延長

でぶかぶかでもワークショップをしたいと思いましたが、創立当初は経営が厳しく、3年目ようやく地域の方々に声をかけて始めることができました。

正木：活動の中で特に印象に残っている出来事がありますか。

高崎：第一期のワークショップで『森は生きている』を上演した際、最後に「勝手気ままな人間をどう懲らしめるか」という場面がありました。普通なら「張り倒す」「縄で縛る」といった発想が出そうですが、ぶかぶかさんたちからは出てきません。結局「握手して仲良くやろう」という結末になりました。そのとき、彼らには「誰かをやっつける」という悪意がないのだと気づかされました。

正木：ワークショップや活動は社会にどんな影響をもたらしましたか。

高崎：オープン当初、地域の方からは警戒されました。接客マニュアルを実践してみても、彼らの本来の姿が失われるように思えました。けれども、演劇ワークショップを通じて地域の方が参加し、ありのままのぶかぶかさんと接することで理解や親しみが生まれていきました。ホールスタッフからはぶかぶかさんの行動に苦情があったこともありましたが、次

第に受け入れてもらえるようになりました。結果的に「ぶかぶかさんと一緒に生きたほうが社会は豊かになる」という実感をみんなで共有できたと思います。支援する・されるという上下関係ではなく、フラットな関係で生きる方が「トクだ」と考える人が増えたのではないのでしょうか。

正木：今後、誰もが芸術を楽しめる社会にするには何が必要でしょうか。

高崎：会場を借りるのも講師を呼ぶのもお金がかかります。助成金に頼らず自分たちで資金を生み出す方法を模索する必要があります。また、ワークショップに参加した人が経験を持ち帰り、自分の地域で小さくても実践してくれることを期待しています。ぶかぶか主催の演劇ワークショップは昨年で終了しましたが、私は今、講師として全国を巡り、その種を蒔いています。

正木 千尋(まさき ちひろ)



人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」にて7年間、企画制作を担当。その後、仙台に拠点を移し、NPO法人エイブル・アート・ジャパン主催「広場の人形劇」など、障がいのある方々と舞台をつくる事業にコーディネーターとして携わる。現在は一般社団法人パップスの共同代表として、「ひとりに寄り添う人形劇(観客は一人)」の開発を行い、誰もが芸術を楽しめる場づくりを目指して活動している。

ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑩

「だるまさんが」

かがくいひろし さく／ブロンズ新社

泣いていた子ども、絵本に興味を示さなかった子ども、ページをめくればみんな夢中！不思議な力をもつ絵本です。ユーモラスなお顔のだるまさんが、横にゆらり。次の場面で思わず笑ってしまうコミカルな展開が待っています。0歳から楽しめるシンプルな絵本ですが、おとなもくぎ付けになり一緒に声をあげて笑ってしまいます。読み聞かせの場では、子どもたちがだるまさんと一緒に体を揺らし、最後は誰もが「にこっ」と最高の笑顔になります。読み手自身も人気者になれる一冊ですから、まだ読んでいない方にはぜひおすすめします。大勢に読むときは大型絵本で、笑顔がさらに広がります。きっとあなたも、だるまさんに夢中になりますよ。

だるまさんが



「なまえのないねこ」

竹下文子 文／町田尚子 絵／小峰書店

主人公は名前のない、ひとりぼっちの猫。まわりのみんなに憧れながら、自分の名前を探し続けます。でも本当に求めているのは…。私は保護猫の預かりボランティアをしています。我が家の2匹も元は捨て猫。外で暮らすにはあまりにも危険が多く、けれど優しい手が差し伸べられることで、新しい命の居場所が生まれます。絵本の中に、保護の現実や野良の厳しさは描かれていません。それでも、ページを閉じると「大切にされること」の尊さが胸に残ります。そして、猫に新しい家族ができる喜びが、静かに心へ沁みわたります。猫を飼っている人もそうでない人も、ラストは思わず目頭が熱くなる、そんな一冊です。

なまえのないねこ



お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。



札幌とは思えない暑さが続く9月6日・7日、あおぞらピクニックシアター in 中島公園が開催されました。公園内4か所に舞台が設けられ、人形劇、パフォーマンス、工作会などが繰り広げられました。残念ながら2日目は雨のため一部屋内開催でしたが、おやつを食べながら外での観劇はとても気持ちがいいものです。(戸塚)